経済教室

故サミュエルソン氏の学問的貢献

教育・研究を「世界標準化」

門下生、きら星の如く

「近代経済学の父」、基礎築く

ポイント

- 教科書の『経済学』で、教育の標準化進む
- 新古典派の基礎築き、広い分野で影響発揮
- 単純化した新古典派モデル、切れ味よく

伊藤　元重　東京大学教授

私のような研究者にとって、13日に亡くなったポール・サミュエルソン米マサチューセッツ工科大学（MIT）名誉教授の業績はどんな影響を及ぼしているのか。今さらいうまでもないが、教授の業績の範囲はあまりに広く、それぞれの分野で非常に大きな影響力を残している。その全容を解説できるのは教授自身だけだろう。以下では、個人的な研究人生の中で遭遇した様々な業績についての印象を述べてみたい。

◆◆◆　◆◆◆

今の若い世代の人には分かりにくいかもしれないが、我々世代の研究者にとってサミュエルソン教授の存在はあまりにも偉大だった。個人的にも、大学入学から10年ぐらい、つまり米国の大学で博士号を取得するころまで、最も多くの時間をかけて読んだのが教授の著作だった。この原稿を書くまではそんな風に考えたこともなかったが、我々の世代の研究者にとって教授の存在なしに経済学習得はなかったのかもしれない。

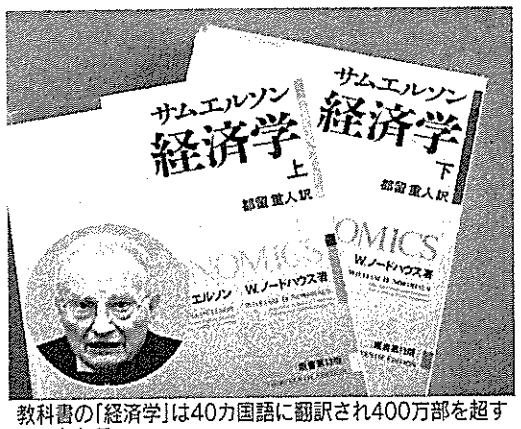
当時は大学に入って最初に読む教科書が『経済学』であった。大部の上下2巻は質量ともに他の教科書を圧倒し、大学の4年間ずっと私の本棚の真ん中にあり、何度も繰り返し読んだ。ただ、ぶ厚い米国の教科書を集中して読み込むのは難しく、いつの間にかこの教科書を枕にして寝ていたこともしばしばだった。

この教科書によって、経済学教育の国際的な標準化が始まったといっても過言ではないかもしれない。それ以前にはこれほど影響力のある初等レベルのものはなかったし、その後はこの本に大きな影響を受けた教科書が何冊も出版されている。

人文社会科学の中で、経済学ほど世界中の大学でその教育内容に類似性が見られる学問はない。そうした教育内容の世界標準化はこの教科書が仕掛けたといってもよい。もちろん、経済学が他の人文社会科学に比べて数理的な手法を多用することも、学問の世界標準化に大きく貢献した。ただ、経済学の数理的分析の多くもサミュエルソン教授の一連の著作から出てきたものが少なくない。経済学の数理的分析手法の発展全般をリードしたという意味も含めて、教授によって経済学の教育および研究の世界標準化が進んだといってよいだろう。

◆◆◆　◆◆◆

さて、私の世代の研究者が大学院に進むころになると、教科書を卒業し、教授のオリジナルの論文に触れることになる。今回の原稿のために書棚から教授の論文集の最初の2巻を取り出してきた。多くの書き込みがある、私にとっては宝物のような本である。1965年の出版で、その編者は後にノーベル経済学賞を受賞するジョセフ・スティグリッツ米コロンビア大学教授である。サミュエルソン教授の主要論文は、この2巻に続き、同じくノーベル賞を受賞したロバート・マートン米ハーバード大学教授による第3巻、さらに著名な国際経済学者ロバート・フェーンストラ米カリフォルニア大学デービス校教授による第4巻と続く。これらの編者はいずれも経済学の大家であるが、サミュエルソン教授が育てた、当時としては新進気鋭の研究者の時代に教授の著作集を編集している。



教科書の「経済学」は40カ国語に翻訳され400万部を超すベストセラー

サミュエルソン教授が中心となって発展してきたMITの経済学部は、世界の経済学をリードする多くの学者を輩出してきた。私の専門分野の国際経済学でいえば、ノーベル賞を受賞したロバート・マンデル米コロンビア大学教授、国際貿易の大家であるロナルド・ジョーンズ米ロチェスター大学教授、そしてMITで教鞭（きょうべん）をとったジャグディシュ・バグワティ米コロンビア大学教授などが続き、その孫弟子ともいわれるMIT系列の人材として、ポール・クルーグマン米プリンストン大学教授やケネス・ロゴフ米ハーバード大学教授らが、きら星の如（ごと）く並んでいる。

MIT関係者や出身者を中心に国際経済学が発展してきたといっても過言ではないが、その原点であり頂点にいたのがサミュエルソン教授である。上記の著作集の中で私の書き込みが最も多いのが、教授の国際経済関係の論文の部分であり、博士論文を書いている前後、文字通り舐（な）めるようにこれらの論文を読んでいたことを覚えている。

教授の業績は国際経済関係にとどまらないが、国際経済学に限定したとしても、その足跡は偉大である。生産技術が同じであるなら、自由貿易が維持されれば地価や賃金といった要素価格も国際価格に均等化していくという有名な「要素価格均等化定理」や、自由貿易は比較優位にある財の価格とその財に集約的に使用されている生産要素の価格の上昇をもたらすという「ストルパー＝サミュエルソンの定理」をはじめ、数々の論文を書いている。

教授の研究の一つの特徴は、素晴らしいアイデアがモデルの中にあり、その後の多くの研究を誘発していることである。教授には小さなことかもしれないが、教授の国際経済モデルの中で輸送費用を処理するための手法としての「アイスバーグの仮定」（氷が溶けるように商品の価値の一部が消失するという近似で輸送費用を表す）を使ったおかげで、後世の多くの若い経済学者が論文を書くのにどれだけの助けとなったことか。

国際経済学、消費者理論、資本理論、財政学など多岐にわたる教授の研究の大きな流れをあえて一言で単純化してしまえば、新古典派経済学の基礎を築き、それを用いて様々な分野で活用し、そしてその利用を普及させたことだ。教授は「近代経済学の父」と呼ばれるようだが、正確には「新古典派経済学の父」と呼んだ方が正確かもしれない。

新古典派の経済学では、いわゆる新古典派の生産関数を巧みに使い様々な問題を分析する。ヘクシャー＝オリーン＝サミュエルソン理論とよばれる国際貿易理論、同僚のロバート・ソローMIT名誉教授などによって発展した新古典派成長理論、財政や分配を扱うマクロ経済モデルなどで、この新古典派モデルが活躍することになる。

当時の世界の経済学界には、こうした分析手法に対し、「あまりに単純で重要な問題の本質を見失う」という批判も強かった。そうした主張の中心的な位置にあったのが、ジョン・メイナード・ケインズの高弟たちが多くいた英国のケンブリッジ大学であった。サミュエルソン教授のいるMITやハーバード大学のある町がマサチューセッツ州ボストン郊外のケンブリッジであったことから、米国と英国のケンブリッジ論争などと呼ばれた。

今となっては、世界の経済学の主流は明らかに新古典派である米国のケンブリッジの方であり、英国のケンブリッジ学派を重視する研究者はほとんどいないように思われる。新古典派のモデルは確かに現実経済を非常に単純化したものかもしれないが、その単純化こそがモデルの切れ味を強め、より多くのテーマへの応用を可能にしている。

教授の研究は大半が理論分析だが、その弟子の中には新古典派の切れ味のよいモデルを実証研究に応用した研究者も多い。これも教授の影響を受けたノーベル賞を受賞したローレンス・クライン米ペンシルベニア大学名誉教授に代表されるように、実証モデルをマクロ経済政策に利用することが戦後、世界の多くの国で広がった。米国では、50～60年代に、ケインジアンの政策手法として現実の政策運営に大きな影響を及ぼした。

◆◆◆　◆◆◆

80年代以降、ミルトン・フリードマンの影響力が増していった。ケインジアンに対抗して、この勢力を新古典派とか古典派と呼ぶので、先で触れた新古典派と混乱しそうであるが、ここでは古典派と呼んでおこう。古典派の政策観はサミュエルソン教授の支持したケインジアン的な考え方とは相当違っている。しかし、どちらの学派に属していても、多くの研究者の成果はかつてサミュエルソン教授が開発した様々なモデル分析を活用することになる。思想や立場は異なっても、共通の分析の枠組みに基づいて分析を行い、結果で論争をするという、健全な論争の基盤が経済学には備わっているのである。

いとう・もとしげ　51年生まれ。ロチェスター大博士。専門は国際経済

＊この記事・写真等は日経新聞社の許諾を得て転載しています。

日本経済新聞　2009年12月18日掲載